

テーマは「宮城県の大豆（乾燥子実）の収穫量」（令和6年産）

宮城県拠点の
Webサイトは
こちら →



○「乾燥子実」とは、食用を目的に未成熟（完熟期以前）で収穫されるもの（えだまめ）を除いたものをいう。



宮城県の大豆収穫量は全国2位

宮城県の令和6年産大豆の収穫量は1万8,900 tで、北海道に次ぐ全国2位となっています。

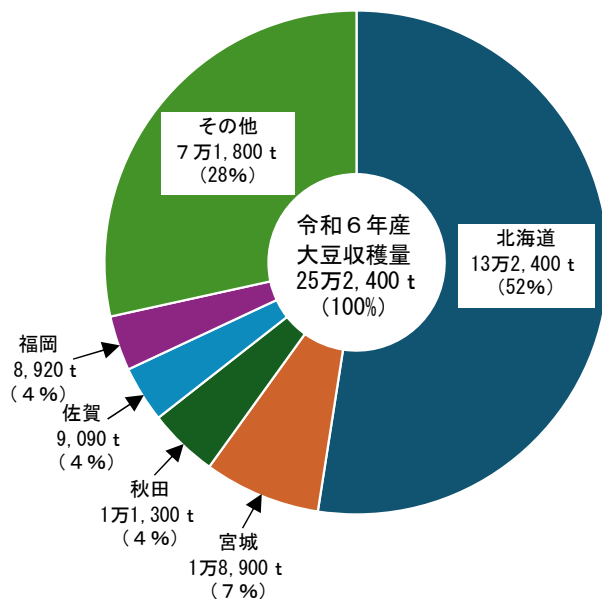
また、都道府県別収穫量の上位10都道府県の3位に秋田県、4位に佐賀県、5位に福岡県の順となっており、10位以内には青森県（6位）、山形県（8位）、岩手県（9位）がランクインしています（図1、表1）。

表1 令和6年産大豆の作付面積、10a当たり収量及び収穫量（収穫量全国上位10都道府県）

全 国 ・ 都 道 府 県		作付面積	10a 当 たり 収 量	収 穫 量
		ha	kg	t
全	国	153,900	164	252,400
北	海 道	46,800	283	132,400
宮	城 県	11,600	163	18,900
秋	田 県	9,260	122	11,300
佐	賀 県	7,270	125	9,090
福	岡 県	8,040	111	8,920
青	森 県	5,640	137	7,730
新	潟 県	4,230	162	6,850
山	形 県	4,900	130	6,370
岩	手 県	4,830	110	5,310
滋	賀 県	7,350	71	5,220

資料：農林水産省統計部「作物統計」

図1 令和6年産大豆の都道府県別収穫量及び構成割合



注：統計数値及び割合については、表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない。

資料：農林水産省統計部「作物統計」



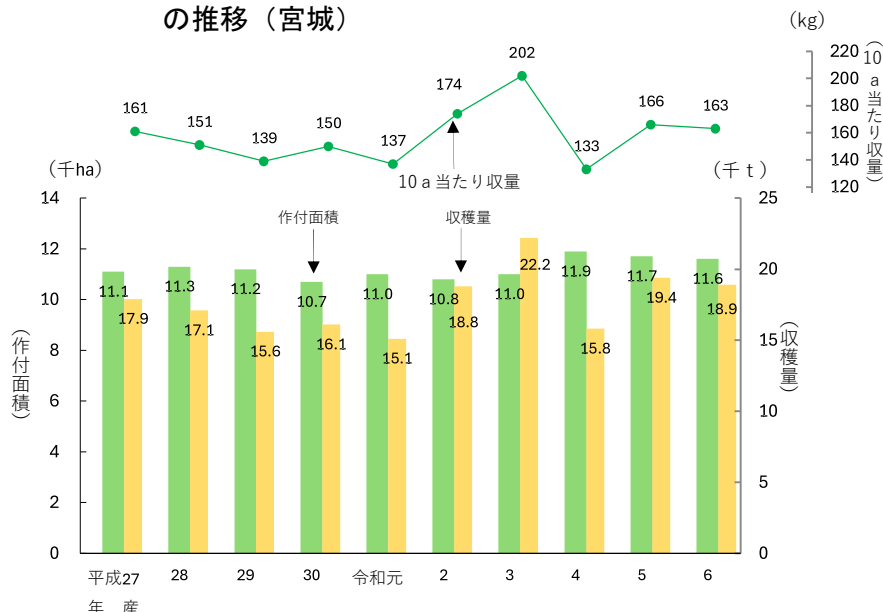
大豆の作付面積、10a当たり収量及び収穫量の推移

－ 令和4年以降、作付面積は約1万2千ha －

宮城県の平成27年産から令和6年産までの作付面積、10a当たり収量及び収穫量の推移をみると、作付面積については、他作物からの転換やブロックローテーションの実施による増減が見られ、1万1千～1万2千ha程度で推移しています。

一方、10a当たり収量及び収穫量については、令和4年の水害による大幅な減少など、その年の気象条件等により増減しており、収穫量は1万5千～2万t程度で推移しています（図2）。

図2 大豆の作付面積、10a当たり収量及び収穫量の推移（宮城）



資料：農林水産省統計部「作物統計」

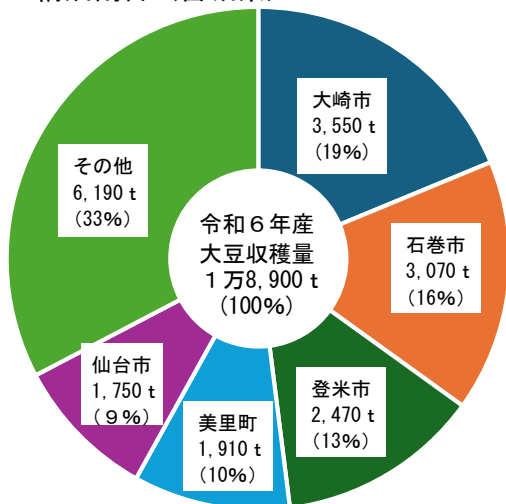


大豆の市町村別収穫量 – 大崎市が全国で9位 –

宮城県における令和6年産大豆の市町村別収穫量の順位は、1位大崎市(3,550 t)、2位石巻市(3,070 t)、3位登米市(2,470 t)、4位美里町(1,910 t)、5位仙台市(1,750 t)の順となっており、この5市町で県内収穫量の約7割を占めています(図3)。

また、市町村別収穫量の全国上位10位以内に大崎市(9位)がランクインしており、宮城県内上位20市町村の全国収穫量の順位は表2のとおりとなっています。

図3 令和6年産大豆の市町村別収穫量及び構成割合(宮城県)



注: 統計数値については、表示単位未満を四捨五入しているため、合計値と内訳の計が一致しない。
資料: 農林水産省統計部「令和6年産市町村別統計」

表2 令和6年産大豆の市町村別収穫量
(宮城県内上位20市町村の全国順位)

単位: t

順位	市町村	収穫量
1 (9)	大崎市	3,550
2 (14)	石巻市	3,070
3 (17)	登米市	2,470
4 (30)	美里町	1,910
5 (33)	仙台市	1,750
6 (50)	栗原市	1,360
7 (77)	東松島市	907
8 (96)	涌谷町	718
9 (100)	加美町	653
10 (102)	名取市	628
11 (166)	色麻町	332
12 (173)	亶理町	294
13 (183)	大郷町	267
14 (205)	岩沼市	226
15 (251)	大衡村	155
16 (291)	角田市	115
17 (301)	山元町	109
18 (307)	大和町	104
19 (375)	大河原町	60
20 (400)	村田町	49

注: 順位の()は全国
資料: 農林水産省統計部「令和6年産市町村別統計」

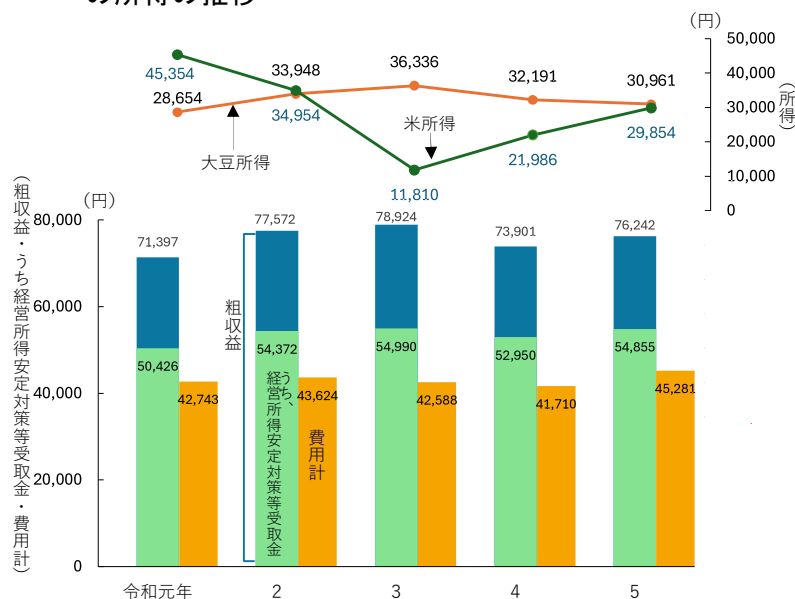


農産物生産費統計における大豆生産費の粗収益・費用計・所得の推移と米生産費の所得との対比 – 米に比べ、大豆は比較的安定した経営収支 –

大豆生産費(個別経営体、都府県平均、10a当たり)の調査結果における令和元年から令和5年までの粗収益・費用計・所得の推移をみると、粗収益は7万1千~7万9千円、費用計は4万2千~4万5千円で推移しており、近年の資材等の高騰を受け、所得については、令和3年の3万6千円から3万1千円程度に減少しています。

一方、米生産費(個別経営体、東北平均、10a当たり)の所得の推移をみると、令和元年の4万5千円から、令和3年では、1万2千円まで減少しており、令和4、5年でも3万円を下回る所得となっています(図4)。

図4 10a当たり的大豆生産費(都府県平均)における粗収益・費用計・所得の推移と米生産費(東北平均)の所得の推移



注: 1 所得は、粗収益から費用計を差し引いた額。
2 費用計は、支払利子・地代算入生産費から家族労働費と副産物価格を除いた費用。
資料: 農林水産省統計部「農産物生産費統計(個別経営体)」